

令和4年度 北海道小学校長会地区活性化支援事業【実践事例レポート】

- 1 報告地区：十勝地区
- 2 事例報告学校名：本別町立仙美里小学校
- 3 報告者職・氏名：校長 松下 政博
- 4 キーワード：特色ある学校経営…地域連携

1 はじめに



本校のある仙美里地区は、本別市街より北に6kmの地点に位置し、利別川流域に開けた狭小な平地と丘陵地帯が南北に連なった所である。気候は、夏に晴天が多く降水量が少ない。また、冬に降水量が少なく寒気と凍上の厳しい気候である。

仙美里市街周辺の平坦地では、馬鈴薯・ビート・豆類等を中心とした畑作農業経営が多く、少し離れた丘陵地では大規模酪農経営が多く行われている。

本校は仙美里市街南端に位置し、仙美里地区の唯一の学校ということで家庭・地域との連携を密にし、地域の文化セン

ターの役割をなしている。PTA活動としては、研修・親睦、教育環境整備をはじめ様々な活動がある。以下、本校での学校・家庭・地域の連携・協働に根ざした、信頼を築き上げる特色ある教育活動を紹介していきたい。

2 家庭や地域と連携した特色ある教育活動（家庭や地域と協働し、つくり上げる信頼関係）

(1) 総合的な学習の時間での地域人材を活用した農業体験（JA青年部との連携）



JA青年部リーダーの2人

農業に携わる家庭が中心の本校では、総合的な学習の時間の取組に農園活動を取り入れている。地域の主要産業の農業体験を通して、自らの課題を追究し、分かったことをまとめていく。また、JA青年部の方を講師として招き支援をお願いするなど、農園活動を通して地域との交流も図っている。



学校農園

① 近隣の農園や学校農園を使っでの農園活動

JA青年部の指導の下、大豆やジャガイモ、さつまいもを

栽培し収穫する。実施時期は6月に種まきや苗植えを行い、10月に収穫する。収穫した大豆は「豆まかナイト」という町の行事に提供し活用してもらう。ちなみに「豆まかナイト」は町の特産品である「豆」をテーマに、鬼がたくさん出てくる「“激”豆まき」や多彩なゲーム大会を展開する節分イベント（商工会議所主催）である。本校児童も数多く参加し、自分たちで栽培したたくさんの豆を鬼にぶつけて厄を祓っている。



豆まかナイト

② 学級園での栽培

JA青年部の方を招聘し各学級毎（本校は3学級）で指導をいただき学級園を運営する。作物は、学校農園で栽培していない作物の中から各学級で好きな作物を選び栽培できる。また、収穫した野菜を用いた会食パーティーをPTAの協力を得ながら企画する。



学級農園

③ 搾乳体験について

隔年で実施している体験活動。今年度（令和4年度）は、実施の年ではなく未実施だったが、JA青年部と連携し、本校に近隣している酪農家に協力をいただき実施している。実施時期は7月上旬を予定している。



搾乳体験

(2) 地域の方々と共につくる学校行事（運動会）

本校の運動会は保護者の方、JA青年部や地域住人の方につけていただく学校行事である。テント設置や校門装飾等の会場準備や後片付け、競技への参加協力をいただく。



JA青年部の方々の競技参加

(3) 地域人材を活かした体験学習（もちつき体験）



餅つき体験

仙美里地区の「餅つき同好会」に指導・協力を依頼し、全校児童参加で開催。子どもたちが楽しみにしている行事の1つである。開催時期は12月中旬。保護者の参加も考え、参観日に実施している。



リンク造成（撒水）

(4) 保護者によるスケートリンク造成

冬の十勝では、小学校のグラウンドにスケートリンクが造られるのはごく当たり前の光景と言える。ほぼ全ての学校で冬場にリンクを設営する。冬の体育のメインはスピードスケートである。特に小学校では、時間を多く当てて指導が行われる授業の一つと言える。しかし決して簡単にリンクは造成できるものではない。マイナス10℃を下回る酷寒のグラウンドに当番の保護者が集まり散水車で夜明け近くまで水をまき続ける。約1週間で完成する。農閑期の畑作農家の方が中心となり進めていただき、教師は完成後の維持管理のみする。保護者の有り難さを痛感させられる。



重機集合

(5) スケート授業後のグラウンド活用

毎年、スケート記録会（午前開催）終了の午後、数台の保護者所有の重機がグラウンドに集結する。グラウンド中の雪を集めて、子どもたちが遊べる山を造るためである。スケートの授業が終わっても子どもたちの歓声がグラウンドから聞こえてくる。3月に入ると、また重機が集まり山を崩し、少しでも早くグラウンドが使えるように除雪作業をする。感謝しかない。

3 終わりに

本校の子どもたちは級友の父親を「〇〇のお父さん」とは呼ばない。その方の下の名前に「さん」を付け、「△△さん」と呼ぶ。それだけ近い人間関係を築いている。もちろん保護者も全ての子どもたち（26名）の名前と気性まで理解している。保護者間の親密性もあるが、とにかく学校の行事に全ての保護者が参加する。しかも保護者自らも楽しそうに活動している。保護者の合い言葉は「子どものため」である。よって、本校の教師に必要な姿勢は笑顔で保護者や地域を受け入れ、共に連携し協働することである。それらにより生じる学校・家庭・地域の信頼関係は本校の真に「宝物」である。この「宝物」がある間は、本校は、輝き続けるだろうと確信する。